

雷の剣士、時間も世界  
も超越す

かーねーごーん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

男の名前は我妻善逸。

鬼無辻無惨の討伐に関わり、鬼殺隊の終わりを見届けた男。

今は一人、山の奥にある小さな家に住む男。

そんな男が戯れに友の形見で遊んだ時、神罰のごとく雷に撃たれてしまう。

死んだと思い、目を開けると其処は：

我妻善逸の逆行モノみたいな転移モノみたいなお話です。作者が多忙なので投稿さ  
れたりされなかつたりなので読む人は気長な人がよろしいかと存じます。

# 目 次

形見で遊ぶべからず |  
再演の最終選別 |  
邂逅、それは何を意味する? |  
雷の剣士は出会う |  
可能性が生まれた日 |  
いざ、産屋敷家へ |

41 34 25 19 11 1



# 形見で遊ぶべからず

～ある日の昼下がり～

よく晴れている日の午後、男はふいに語りだした。

少し、昔話をしてやろう。

俺が此方に来ることになつたあの日の事を。

あれは、今みたいに晴れた日だつた。

その日は仕事も休みで、俺は自宅で寛いでいたんだ。

愛刀の手入れをして、続けて形見の刀の手入れをしていた時のことだ。

あの戦いからどれ程の月日が流れただろう。

「俺も衰えたもんだな…」

縁側に座り、黄色の布地に三角の柄がある、爺ちゃんに貰つた、大切な羽織を肩にかけながらぼそりと、俺は呟いた。

手には友の日輪刀、傍らには俺の日輪刀。黒い刃が日にあたり、輝いている。

「思えば死ぬ死ぬ言いながら、ついぞ死なんかつたな」

戦いの日々の中で、師が、兄弟子が、知り合いが、友が、鬼が消えて逝つた。  
それで世の中で何か変わることもなく、俺達の戦いの歴史は時間と共に時代の中に埋もれていつた。

思い出すのは辛く、悲しく、だけど大切な思い出、記憶。

### 鬼舞辻無惨

最初の鬼にして、最凶の鬼だつた。

奴との戦いは苛烈、熾烈を極めた。多くの命と、多くの人の人生を犠牲にしてようやく奴を倒すことができた。

その中で俺は生き残れた。生き残つてしまつた。

俺より生き残つていなきやいけない奴が沢山いたのに、俺より長生きしなきやいけない奴が最後の戦いでその命を削つて、削つて、削りきつてしまつた。

## 竈門炭治郎

日の呼吸、ヒノカミ神楽を持つて無惨を最後まで追い詰め、滅した英傑。俺の同期、俺の親友。

全てが終わつて、重体だつた俺達は蝶屋敷に入院していた。そこで身体を休めて、暫くしたある日、気づいてしまつた。気が付いてしまつた。

炭治郎から聞こえてくる色々な音が少しづつ、少しづつ、小さくなつていることに。最初は勘違いだと思つた。炭治郎はいつもと変わらないような表情で声で、笑つていたから。

でも俺は臆病で心配性で弱虫だから、その違和感を無視できなくて、でも炭治郎に聞くのは抵抗があつて、だからアオイちゃんに聞いたんだ。炭治郎の病状について。

聞くんじやなかつた、聴かなきやよかつた。

炭治郎の命があと少ししかないなんて、知らなきやよかつた。

「なあ、善逸」

「なんだよ、炭治郎」

「禰豆子の事を頼むよ」

ある日の昼下がり、突然そんな事を言い出した炭治郎をボケッとした顔で見つめてしまった。何を言つてゐるのか、理解出来なかつた。

「は？ なに？ 何なの？ 若い身空でついにボケたの？ 戦い過ぎちゃつてほうけたの？ はーー！ 全く、気が抜けすぎじゃない？」

俺が罵倒してゐるにも関わらず、炭治郎は笑つていた。ニコニコと、屈託のない笑顔だつたのを今も覚えている。

「善逸、分かつてんんだろう？」

「何の事？」

「俺の死期が近いことさ」

思わず胸ぐらを掴んで睨み付けた。それでも炭治郎は笑つていた。

「冗談でもそんな事いうなよ！ お前は生きる！ 生き続けて、そんにカナヲちゃんと結婚して、子供を育てて！ それで「善逸」：何でだよ、何で笑つてんだよ…」

「自分の体だから、何となく分かるんだ。もう、そんなに時間が残つてないんだろうな、て

胸ぐらを掴んでいた俺の手を、炭治郎が自分の手を重ねてほどく。視界が歪む。ボタ

ポタと、涙が溢れて止まらなかつた。

「善逸はさ、いい奴だから。情けない所がいっぱいあるけど、それが震んじやうくらいに優しくて、強くて良いやつだから。それに、鬼だつた頃から禰豆子を好きだつて言い続けてくれたから。俺は任せたいんだ」

覚悟が決まつてゐる。そんな音を聴いて、俺は何も出来ない自分が情けなくて、でも、親友の願いを望みを託されて、泣き続けることしか出来なかつた。

その言葉から三年後、炭治郎は眠るようにこの世を去つた。

「ままならんかつたよなあ」

それからはひたすらに走り続けた。

鬼舞辻無惨の血を多く受けていた鬼は無惨討伐と同時に灰になつたのだが血を少ししか受けてない鬼が残つてゐる事が発覚し、鬼殺隊は徐々に規模を縮小させつつも、鬼の討伐を続けた。

その中で俺は雷柱をお館様から任命されて、親友の願いもあつたけど、自分の気持ちをちゃんと伝えて禰豆子ちゃんを嫁に貰い、子供が出来て、幸せで、孫が出来て、師匠

と同じ歳になり、妻の最期を見送つて…

「いつけねえ、湿っぽくなつてゐるな」

縁側から庭に出る。友の刀を右の手に、自分の刀を左手に。そして、構える。

「獣の呼吸…なんつって」

とまあ、遊んでいたら何か雷が落ちてきてな?

おかしなもんさ。あの時は晴天で、雲一つなかつたのにな? 形見の刀で遊んでいた天罰かね?

んで、感電して氣を失つて氣づいたら山の中、身体は全盛期に戻つとるし、隊服を着てるし、友の刀と自分の刀を持つてるので頭がこんがらがつちまつたよ。

そこで数人の子供と会えて事情を聞いたんだけど、ま、その話は追々話してやるとして…

まあ、一つ忠告しといてやろう。

「形見で遊んじやだめだぞ、天罰くらつて死ぬ思いするから」

これは臆病だつた優しい雷の剣士の物語。

彼が居たのは選別の鬼の山、子供達は未来の柱、そこは己の過去と似かよいながらも別の過去、服のボタンをかけ間違えたような、でもそれが正しい世界。彼が世界を歩き、聴く音は一体どのような音色だろうか？

「助太刀感謝する。俺の名前は鎧兎、後ろの2人は義勇に真菰だ」

死ぬはずだった者達との邂逅

「僕の名前は煉獄千寿郎、こつちは弟で継子の杏寿郎だ、よろしくね」

「杏寿郎だ！よろしくお願ひする！」

生まれが逆転した兄弟

「僕の名前？無一郎だよ。そして、俺が有一郎だ」

一つの身体に二つの心を持つ者

「行きましょう、しのぶ」

「分かってるわ、カナエ」

姉妹であれど、双子になつた者

「悪鬼滅殺：忍とは影なり」

地味な忍者

「私が長女の禰豆子です！こつちは兄の炭治郎！」

「…こんにちは、炭治郎です」

性格に差異がある者

「なに？あんた、ぶつ殺されたいの？」

性別も性格に変わってしまった者

さあさ、舞台の幕が上がる。

神か閻魔のいたずらか、どうして剣士がこの場に居るのかは、誰も知らない、分から  
ない。

さりとてやる事、変わらず、変えられず、己の刃をその手に持ちて、変えてみせよう  
惨劇を。

悔いの残らぬ人生を、今ひとつひと歩み行く。

心やさしき雷剣士、悲しき運命さだめを断ち切りて、それらをもつて終いとしよう。

「さて、いつまでも悩む程若くもないし、何処まで通じるか分かんないけど、死なない  
程度に頑張りますかあ！」

世界も時間も違えども、雷の剣士は再び駆ける。

今度こそ、周りの人々から少しでも良いから幸せの音色が聴こえる事を、世界が違え

10 形見で遊ぶべからず

ど友を救える信じて。

# 再演の最終選別

大正？年 深夜

うるさい程に聞こえてくる音色に目眩がしてくる。

そんな感覺に襲われた善逸はこめかみを押さえながら状況を理解しようと考える。

自宅の庭で落雷を受けて一瞬、気が飛んだと思えば火傷もなく、次の瞬間には暗い森の中に一人佇んでいる。

「新手の血鬼術？いや、鬼は殲滅した。間違いない、お館様も徹底して調べて確認済みと言つていた。誘拐？こんな爺を誘拐して誰が得をするというね、そもそも、此処はどこよ？なんで森の中？なんで鬼の音が聞こえんの？夢？痛い！夢じやない！しかも声が高い！若い頃みたい！」

一人でわちやわちやと喋りながら顔をつねつたりギヤーギヤーと騒ぎ、奇行を繰り返す善逸。

その背後から一つの影が善逸に向かつて飛び掛かつた。

「肉だ、肉を食わせろー！」

飛び掛かる影、それは鬼。

人を殺め、人を食い、世を乱す悪鬼。

それは滅ばさねばならぬもの。

普通に暮らす人々にとつては脅威に他ならない。

鬼に親しき者達を殺され、涙を流した人は数知れず。

だから、排さねばならない。

己の携えたこの刀は、鍛え上げたこの力は、

弱きを助けるためにあるのだから。

「霹靂一閃」

攻撃は一瞬。瞬きの刹那。

雷となつた善逸を捉えられる者はいないだろう。

鳴柱なりばしら：いや、雷柱いかづちばしらとなつた、彼を。

「は？え、なん…」

頸をはねられた事すら知覚出来ずに灰になる鬼。

霹靂一閃、鬼がいなくなり鬼殺隊が解散となるその時まで使つてきた善逸の得意とする雷の呼吸の一の型。

若かりし頃のように鬼に怯える事もなく繰り出されたその技は年月とともに洗練され、余計な動きも溜めも無く繰り出せるようになつていた。

「ええ～～～…ちょっと待つてよ。これ、本当に鬼じやん、どうなつてんのよ。この状況」

灰になつた鬼を眺めながら困惑を隠しきれない。

何故、鬼がいるのか、山の中にいるのか、隊服を着ているのか。  
何がなんだか分からぬがとりあえず鬼がいるのなら切らなければと、音を聴く。  
年老いても衰えること無く、耳をすませば色々な音が入つてくる。

「あー、うん。とりあえず行かなきややばいな」

遠くから悲鳴と怒号が聞こえてくる。  
音を頼りに善逸は駆け出した。

### 場面転換

鎧鬼、義勇、真菰。三人の子供は異形の鬼と対峙していた。体を腕や手で覆い尽くした巨大な鬼。

その鬼から繰り出される攻撃を三人が各々動き回ることによつて躱し、切り裂き、いなす。その攻防が十数分と繰り返されていた。

普通に考えればこのような異形の鬼と対峙したならば逃げるのが正解と言える。  
何故なら此処は選別の山、藤襲山。

入山する前に行われた説明には鬼殺隊が捕えた力の弱い鬼しかいない筈のこの山で、  
7日間生き残る事が鬼殺隊への入隊条件である。

そう、本来ならこのような異形の鬼はいない筈なのだ。

「義勇！ 錆兎！ 下がつて！」

「チツ！ また地面から腕が！」

「近寄れない……！」

真菰が指示を飛ばし、錆兎が頸を切らんと駆け回り、義勇が二人の補助をする。育手、鱗滝左近次に教えを受けて鍛え上げられた三人は同門、同期故の連携を駆使して異形の鬼と何とか渡り合えていた。

『ちよこまかと逃げ回るなあ！ 狐ええ!!』

翻弄される異形の鬼……手鬼は何本もある手と腕を振り回して三人を捕えようとするが一人を捕まえようとしたら二人に邪魔され、三人同時に相手にすれば隙が出来てしまい接近を許してしまう状況に苛立ちを隠そうともせずに叫ぶ。

「誰が捕まるか！ 馬鹿鬼が！」

接近してきた手に対しても逆に踏み込んですれ違い様に切り落とし、相手を挑発する錆兎。

「水の呼吸、一の型、水面切り！」

手鬼が錆兎に意識を向けた瞬間、頸を切ろうとして飛び上がる義勇だが、それに気づいた手鬼が腕を一本犠牲にして頸を守る。

「義勇！ 水の呼吸、水車！」

真菰。

ただ、咄嗟に庇つたために威力が足りず腕を切り落とせなかつた。そして、それが仇となる。

『おあああ!!』

「あっ、が!?」

手鬼は切りつけられた腕をそのまましならせて真菰に叩きつける。技を出した直後に攻撃をまともに受けてしまつた真菰は咄嗟に受け身は取れたが呼吸が上手く出来ず、その場に膝を着いてしまつた。

「真菰!」

『死ねえ！狐ええ!!』

上段から振り落とされた手が真菰に迫る。真菰からみればそれはひどくゆっくりとした動きに見えた。それこそ避けれそうな程に遅い動きだ。

視界の端には此方に駆け寄る義勇と鎧兎も見えた。

だが、それでも痛む身体は動かず迫る手に何も出来ない。

(あ、死んじやう)

一瞬、鬼に殺されてしまつた両親が頭をよぎる。

何も成せずに死ぬのか、殺されてしまうのか。

両親の仇を取るのではなかつたのか、鬼に幸せを壊された人を少しでも減らすのではなかつたのか？

様々な思いが頭を巡る。

悔しさが、悲しさが込み上げてくる。

覚悟はあつた、鬼と戦う以上は死と隣り合わせだと師である鱗滝に常に言われていたから。

でも、それでも、死にたくない。

「誰か、助けて」

眼前まで迫る手を前に、泣きそうになりながらも真菰は呟いた。

その声は小さかつた。義勇や鏑兎、手鬼にすら聞こえなかつただろう。だが、ただ一人だけその声を聞いた者がいた。

そしてその者は、この絶望を覆すことが出来る者でもあつた。

〔霹靂一閃、五連〕

ドン！、と雷が落ちたような音が辺りに響いた。  
それが五回。

音に驚いて目を閉じてしまつた真菰。

辺りが静かになり、来るべき手鬼の手も来ないことに困惑してゆっくりと瞼を開ける  
とそこには信じられないような光景が広がつていた。

音に驚いたのか尻餅をついている義勇。

刀を構えたまま啞然とした表情をした鎧兎。

腕と頸を断ち切られて崩れ落ち、灰になつていく手鬼。

そして：

「ふうー、間に合つて良かつたあ」

白い鞘と黒い鞘の二刀を腰に差して、髪を黄色に染めてその髪に合わせたような黄色  
の羽織を着た隊士がそこに立つていた。

# 邂逅、それは何を意味する？

大正？年 深夜

異形の鬼を斬り捨て、善逸は三人を見据える。

あの巨躯の鬼を三人がかりとはいえ相手取る事が出来ると見るのは、見処があるなあと観察していると宍色の髪に頬に傷のある子供が刀を下げつつ一步、此方に出てきた。

「助力、救援に感謝する。しかし、ここは最終選別の場。何故、隊士の方が居られるのかお訊きしたい」

警戒を解かない少年に善逸は感心した。

そう、選別の山ではどんな状況だろうと鬼殺隊の隊士が救援に来る筈がないのだ。

この山で生き残らなければ鬼と戦うなど出来ない、という考えなのだろうが、それで将来の芽がつぶれてしまつてはと考えたのは歳をとつて自伝を書いていた時になつてからだつた。

「あー、うん。 そうだなあ、なんというか…」

声を聞いて駆け出し、その勢いでそのまま助けに入つたが、特に考えもしなかつたので問われて言葉に詰まる。

と、いうよりは自身の現状すら覚束ない状態なのでそこまで頭が回らない。

「鏑兎、真菰が！」

もう一人の少年の叫ぶ声に引かれて目を向けると、先ほど殴られた少女が意識を失つたのかぐつたりとしていた。

「真菰！ しつかりしろ！」

堪らず空色の子、鏑兎と言われた子が駆け寄る。

このまま去る事は容易に出来る。この子達は才はあれどまだ未熟だ、追い付けはしないだろう。だが：

(絶対寝覚めがよくないよなあー…)

それに、そんな薄情な事をすれば自分が死んだ後に逝った時に、彼方にいる嫁に顔向け出来やしない。

「ちよいと、ごめんよ。そんなに動かさない方がいいよ。打ち所が悪いとまずいし」

少し離れた位置、後ろから声をかける。警戒している相手に近付かれたら彼らは尚更落ち着けないだろう。

「で、でも、どうすれば？」

「落ち着きなさい。此処から見たところ外傷は切り傷だけのようだし、あと一步で死ぬかも知れなかつたんだ。緊張が切れてしまつて気を失つたんだと思うよ」

所感だけどね、と付け加えると二人落ち着いたのか肩から力が抜けて腰を落ち着けてしまつた。

「まあ、それはそれとして」

グッと脚に力を込めて一足で飛び、彼らを越えてその先にある茂みに飛び込む。そのまま少し駆けると此方の存在に驚いていた鬼と目が合う。

流れのままに呼吸を深めて柄を握りしめる。

「な、なんで…ばれて、」

「分かりやすいんだよ、お前達の音は」

善逸と鬼との擦れ違い様の言葉。

鬼の言葉が聞こえる頃には、善逸はドンツと脚で地面を踏み抜き、瞬時に頸を断ち納刀、駆けた勢いを止める為に脚に力を込めてザリザリと土を抉ぐり、止まつた時には喋る者もなく、夜の静けさが辺りに戻る。

塵となつて消えていく鬼を確認し、先ほどの子供達の元に戻ろうとして、ふとこのまま逃げようかとも考えたが現状確認の為にもそのまま歩を進め戻る事にした。

それに、気になる事もある。

(真菰少女が口にした名前：)

### 『義勇』

善逸はこの名前が気になつて仕方がなかつた。

水の呼吸を使つていた親友の兄弟子であり、癌を発現させた事により若くして亡くなつた水柱の人と同じ名前。

容姿は暗がりな事もあつてよくは見えなかつたが頬に傷があるのが鎧兎少年なら、気絶していたのが真菰少女、その横にいたのが義勇少年の筈だ。

「これは、とんでもない事になつてるので?」

もし彼が自分の知つている水柱、富岡義勇と同一人物だとしたら彼が少年といえる体躯をしているのも解らないが、そもそも死者が生き返る事はない、あり得ない、あつてはいけない。

だとするならば、此処は本当に何処なんだ？

この身に何が起きているんだ？

此処は…自分の生きてきた時代なのか？

「やだやだ、もう嫌な予感が凄いんだけど。もう確信になつちやいそうだよ、これ。いや、確信しちゃうね。そりや形見の刀で？友の型を真似たのは罰当たりだけどさ？この老体だよ？神罰にしては重すぎません？神様？あれ？でも俺、今若いんだつけ？鏡が無いから分からん！分からん」とだらけで不安しかねえよ！誰かー！何とかしてえええええ！」

ボソリと呟いた言葉が叫びに変わるが、それは誰に聞かれる事もなく、夜の森の中に消えていった。

# 雷の剣士は出会いう

大正？年 明け方

鬼を討ち、善逸が鎧兎少年達の元に戻ると真菰少女は気を取り戻したようで木に背を預けて休んでいた。

茂みから現れた善逸に対し鎧兎と義勇が咄嗟に刀を向ける辺り、しつかりと育手に教え込まれて事が活きていた。

「あ、先ほどの…」

「いやあ、突然飛び出していつですまないね。ちょっと鬼が此方を見ていたから討伐しておきたくてね」

三人がホツと息をつく。

手鬼の討伐、距離を保つた対応が功を奏したようだ。

若かりし頃の善逸なら其処まで氣を回せなかつただろう。だが、今此処にいる善逸は

それなりの年月を生きてきた男だ。子供に対しての接し方もある程度心得ていた。

「そういえば、俺の名前を名乗つてなかつたね。俺は善逸と云うんだ。君達の名前を聞いてもいいかい？」

表面上は澄ました顔をしているのだがこの男、内心は激しく乱れていて義勇少年の名前が富岡じやありませんように！と必死に神頼みしていた。

でなければ、自分は過去に戻つたということになり、また鬼退治をしなければならなくなるからだ。

「あ、名乗らずにいてすみません。真菰といいます」

「俺は鎧兎です。助けて頂きありがとうございます」

「俺は…義勇です。ありがとうございます」

善逸はなるほど、と頷くが内心は複雑だ。

三人とも名乗つてくれたが肝心の名字が解らない。

だが、此処で深く詮索するのは憚られた。

自分の名前、我妻善逸も自身が捨て子だったから名前が無く、自分で名乗るようにした名前だからだ。

彼らもそうなのかもしれない、と思うと聞くに聞けなかつた。

「真菰、義勇、鎧兎だね。よし、袖触れあうのも多生の縁だ。君達が良ければ少しの間、一緒に行動しないかい？今は選別の最中だろうけどあんな巨躯の鬼が居たのは明らかな異常事態、其処を隊士である俺が助けたとしても問題ない筈だ。なんせ異常事態だからね」

善逸はそう提案したあと、音に集中する。

三人のうち義勇と真菰は驚きが少し、あとは安堵が大半といったところだから良しだが、鎧兎からは不安と不満の音がしている。

何か問題があつたろうか？と考えたが思い当たる節もない。

善逸のそんな考えが顔に出ていたのか、鎧兎が一步此方に出てきた。

「申し出はありがたいと思います。けれど、それでは最終選別を真に乗り越えたと言えないと、俺は考えています。確かに、あの手鬼は異常だったと思いますがここから更に

貴方を頼つては、力を当てにしてはいけないと、そう思います」

きつぱりと言いきる鎧兔。

その言葉にハツとして覚悟を決めたのかしつかりとした顔つきになる義勇と真菰。

善逸は鎧兔の心意気に感心しつつも、残念に思つた。

善逸としては一緒に行動することで信頼を得て義勇の名字、更には現状を少しでも聞き出そうと思つていたからだ。

「どうか、分かった。君がそう言うのであるならば、俺が無理強いするのも野暮だ。俺は此処で別れるが君達の武運を祈つているよ」

「はい、ありがとうございます！」

鎧兔達に背を向け、明け方の森へと駆ける善逸。

それを背中を見届けた鎧兔は後ろを振り返り、義勇と真菰に目を合わせる。

「すまない、お前達の気持ちも聞かずに俺の気持ちを優先して言葉にしてしまった」

頭を下げる鎧兎。そんな鎧兎に義勇と真菰は目を合わせてクスリと笑う。

「ううん、大丈夫だよ。鎧兎が言わなかつたら私はあの人に頼りきりになつちやつたかもしれないし」

「大丈夫、鎧兎は正しい」

二人の言葉に頭をあげてありがとう、と伝える鎧兎。

気持ちを新たに最終選別に挑む3人が無事に山を下る事が出来たのは言うまでもなかつた。

### 場面転換

最終選別の終わりまで後二日になつたころ、明け方の山の麓で待機していた隠の隊員達の前にその男は現れた。

「あのー、すみません。自分、隊士で善逸と言うものなんですが今、年号はなんでしょう

か？」

「は？」

隠達は困惑していた。

最終選別の山から降りてきたのが選別を受けていた者達ではなく、隊服を身につけた隊士だったからだ。

しかも髪は黄色、羽織も黄色、二刀を佩いた隊士とかなり突つ込みどころ満載の人物なのが困惑に拍車をかける。すわ鬼の血鬼術かと警戒したら年号はなんでしょうか？と聞いてくる。

「と、とりあえず階級を示してください」

下手な対応は命に関わると判断した隠の代表格の一人が警戒しつつも善逸と名乗る男に告げる。

鬼なら階級など示せないし、隊士であるなら手の甲に階級が浮かび上がつてくるはず。

「はいはい、階級ですね」

男が腕に力を込めて『階級を示せ』と口にする。

その言葉に反応して浮かび上がつてくる文字にひとまずは安堵した隠達。そして階級を確認しようとして、回りに居た隠はさらに困惑することになる。

「「「雷?」「」」

浮かんだ文字は雷、階級以外の文字が浮かぶのは鬼殺隊においてお館様の次に最高位の存在として存在している柱以外にあり得ない。

『柱』

鬼殺隊の中で最高位の称号。

甲の隊士が十二鬼月を討伐するか、鬼50体以上の討伐を達成する事が条件であり、特例でもない限りは「柱」の画数が示す通り9人しか至れない称号だ。

そんな称号を示したこの男は柱なのか?と隠達は思つたが場所と状況が困惑を加速

させていた。

そう、柱がなぜ藤襲山にいるのか？山から降りてきて年号を聞いてきたのか？

そして、最近は新しい柱が任命されたとは聞いてはいないし、何よりも「雷」の文字から雷の呼吸だと推測されるが雷の呼吸なら代々鳴なりはしら柱として任命されているから手の甲には「鳴」が浮かぶ筈なのだ。

そもそも、今の柱には…

「随分と騒がしいですね？」

隠達の困惑の外から聞こえた声に全員が顔をそちらに向ける。

ザリ、ザリと砂利を踏み鳴らしながら現れたのは黒い隊服に黄色い羽織を纏い、肩の辺りまで伸ばした髪を揺らしながら開いているのか分からぬほど細められた狐目の青年であった。

「はじめまして、隊士の善逸君。私はお館様から鳴柱を拝命致しています、小金井こがねい修おさむと

やんわりと笑顔を浮かべて、自然体でありながら警戒心を一切解かない鳴柱。

そう、隠し達が困惑した理由の1つ。今はいるのだ。雷の呼吸の使い手にして、柱にまで上り詰めた人物が。

「ちょっと私とお話ししませんか？」

そう言われた黄色の髪の男、善逸はヒクヒクと表情筋を痙攣させながら笑っていた。

# 可能性が生まれた日

藤巻山の麓から、少し離れた小屋の中では2人の男が正座で向かい合う。姿格好はよく似た二人だが片方の男は黄色の髪がやけに目立つから気になり、片方の男は狐目が気になつた。

「改めて自己紹介としましよう。先にも言いましたが私の名前は小金井 修。鳴柱を拝命しております」

「あ、と。善逸と言います」

それだけの言葉を発しただけで、しん、とした空気が流れる。コホン、と小金井が咳払いをして善逸に言葉をかける。

「善逸さん、私は麓での隠達との会話を聞いていました。その上で貴方には幾つか聞きたい事がありますし、貴方にも聞きたい事があるでしょう。この場は人払いもしています。心置きなく聞いてください」

「ア、ハイ」

小金井は安心させるような素振りでそう口にするが、善逸は小金井が此方に対しても警戒している事を音と雰囲気で察していた為に割と緊張していた。

「では、最初は私からの質問です。善逸さん、今の元号は何年かと聞いていましたね？貴方はずっと見た感想になりますが二十歳かそこらのよう見えます。それに隠達に対する態度や言動から見ても教養があると感じました。それを踏まえて聞きましょう」

そこで口を止め、細めた瞼を少し開き善逸を見つめる。少しの動きも逃さないよう  
に。

「なぜ、今の元号を知らないのですか？」

善逸はゴクリと唾を飲み込む。

善逸自身、鬼殺隊で最後まで戦い抜いた一人だが柱と一対一で話す事がなかつた事、  
話す事があつてもその時には自分自身が柱だつたこともあり、現状のような事にあつた

事が無いために余計に緊張をしていた。

「（どうする？何て言えばいいんだよ！実は未来からきたんで分からなかつたんですけど、とか言うのか？アホか！頭おかしい奴に思われておしまいだろ！かと言つて嘘をついたところですぐにバレそう、というか絶対バレる！俺の馬鹿！何で不用意に元号聞いてんだよ！言い訳出来ないじやん！てかさつき二十歳そこらに見えるつて言つた？やっぱり若返つてんじやねえか！くつそー！何か頭がこんがらがつてきた！誰か助けてえーーー！）えーと、ですねえ、それはーそのー…ひえ！」

答えに窮する善逸にそれを観察する小金井。しどろもどろしている善逸の横で、キン！と刀を納刀する音が響いた。

「今のは……？」

「…………」

二人は座つており、刀を腰から抜いて自身の横に置いた状態だ。もちろん、二人は刀を手にしてすらいないので、納刀する音がする筈も聞こえる筈もない。

小金井が辺りを見回すなか、善逸は音が鳴った刀をじつ…と見つめた。音が鳴ったのは自分の刀ではない、親友の刀だ。

信じると、言われてる気がした。

「ふう…そうだな炭治郎。お前は情けない俺を信じてくれたもんな」

「善逸さん？」

一度、息を深く吸い込みゅっくりと吐き出す。

しつかりとした覚悟を決めた善逸の眼差しに、小金井は彼の中で何かが変わった事を察した。

「小金井さん。柱である貴方を、鬼殺隊である貴方を信じて、今から全てをお話しします。貴方が今から聞く話は荒唐無稽と断じられてもおかしくない話です。ですがこれは俺が経験した全てです。それを信じられないと言うのであれば、残念ですが、どうしようも無いことです。その時は俺を見逃して下さい。俺にはやらなければならぬ事があります。どうしても、やらなければいけない事があるんです」

その場で頭を床につけ、土下座をする善逸。

覚悟を決めたその姿勢に、その心に小金井は迷いと疑いを覚えてしまう。

話を聞いて駄目なら見逃せと言われて、はい分かりましたと納得は出来ない。だが、彼の経験した全ては気になる。あたかも長年の経験を話す、と言っているように感じたからだ。そして善逸のやらなければいけない事とは何か？それ程の覚悟を見せる理由とは何だろうか？

「…分かりました、お話を聞きましょう。ですが、見逃すかどうかは聞いてからです。貴方がやらなければいけない事も、内容次第ですが人の為になると言うのであれば私も微力ながら力添えしましよう」

「…ありがとうございます」

小金井はとりあえずは善逸の話を聞く事にした。

人に仇なすならば、お館様を通して警察に突き出してやればいいと考えていた。

善逸も疑われている事は分かつていてるが話を聞いてくれるならば、とりあえずよしと考えた。

だが、小金井は知らない。これから善逸が話す内容は自身の度肝を抜く事になる上に、とても自分で処理出来る問題では無いことを。

「小金井さん、話す前にお聞きしたい事があります。これを聞かないとそもそもその話が進められないからです。教えてください。いまの元号を」

善逸も元号を聞いて驚く事になる。

鬼殺隊は歴史が長く、富岡義勇とおぼしき子供には会つたが本人かどうかの確証がかつたので今の年代が判別出来なかつたからだ。だが、あれが本当に富岡義勇であれば、いろいろと出来る事が広がる可能性があつた。

「フム…分かりました。お答えしましよう、今の元号は…」

小金井から年号を聞いた善逸は思うだろう。  
もしかしたら、

最愛の人の家族を助けられるかも知れないと。  
散つて逝つた仲間達を、多くの人達を助けられるかも知れないと。

自分の師匠が死ななくていいかもしないと。  
親友を、失わずにすむかもしないと。

「明治、ですよ。明治40年です」

その全ての可能性が生まれた瞬間だった。

## いざ、産屋敷家へ

ふと、外を見ると時は既に昼を迎えていた。

善逸と出会ったのは夜明け前、あまりにも、あまりにも衝撃的な内容に小金井は終始驚き、憔悴していた。

「鬼舞辻無惨の討伐に成功した、未来…」

善逸から語られた数々の話、善逸は本来であれば五十は越えた歳であり、藤襲山には何故か若返り隊服を纏つて立ち尽くしていたこと。そこから下山し、私達の前に現れて今に至る。

そして知らされる上弦の月の鬼達の姿や能力、これから起ころうであろう事態、彼の知る限りで犠牲になつた者達、患者、赫刀、さらには無惨の能力まで、鬼殺隊の柱である自分ですら知らなかつた、いや、鬼殺隊が知らない事まで話されて。

「信じらませんよね」

軽く思考停止してしまつた私がハツと前を向くと、悲しげな目をしながら、それでも微笑みながら善逸はこちらを見つめている。

「馬鹿な話だと、俺でも分かります。けれども、俺が柱に就任した代で滅ぼし尽くした鬼があれだけいて、俺自身も二十代。己の時だけ巻き戻されたものかと思いましたが、どうやらそれも違うみたいだ」

善逸は自身が雷柱に任命された時に歴代の鳴柱を確認したという。そこには先代の鳴柱、桑島殿の名前はあつたが私の名前は無かつたそうだ。

「俺が話した内容は、貴方には、貴方達には信じられない出来事だ。だからこそ、信じて欲しい。これからを、此処から、この時から変えるために」

正座をし、姿勢を正した善逸はそのまま床に頭をつけんばかりに頭を下げる。

「悲しみを、これ以上増やさない為にも、どうか」

その姿に重なるように見えたのは、私に想いを、願いを託して逝ってしまった者達の姿のような気がして、私は彼から目が離せなかつた。

### 場面転換

「ほう、それは本当なのかな？」

夕焼けが空を綺麗に染める頃、鳴柱の担当をしている鎌鴉からの伝言を聞き、私は複雑な感情をもて余すことになつた。

嬉しい、気味が悪い、驚き、疑問、興奮、嫌疑、いろいろと混ぜ回した感情がぐるぐると渦巻いていく。

「これは、是が非でも会わなくちゃならないね」

歴代の産屋敷当主ですら知らない事を知る者、善逸。自身の直感が告げてくる。この自分が当主であるこの時代はかなりの波乱に満ちる

であろうことが。

その波乱の果てに、何が起ころかは分からぬがそれでも願つて止まない事がある。

「必ず、必ず終わらせてみせる。私の代で終わらせてやるぞ、鬼舞辻無惨」

呪いで皮膚が爛れ、見えなくなりつつある視界。

だがその瞳に消えることの無い憎惡の炎を宿して、産屋敷輝哉は広がりつつある夜の闇を睨み付けた。

### 場面転換

夜の闇のなかを二つの影が駆けていく。

二つの黄色の羽織はその速さもあつて不規則にはためき、雷が地上を走つているように見えた。

「大丈夫ですか？ 善逸さん」

「これくらい、問題ないですよ。小金井さん」

息を乱すことなく、駆け抜ける二人はある場所を目指していた。日が暮れた頃に二人の元に鎌鳩が訪れ、その流暢な言葉使いに産屋敷家が直接遣わした鎌鳩と分かつた二人はその内容に驚愕した。

「鳴柱小金井、最優先任務として、藤巻山に現れし鬼殺隊員を連れて産屋敷家に出頭せよ」

此處で驚愕したことは二つ。

一つは柱直々に善逸を連れて来いということ。

二つは善逸は藤巻山に来て一日か二日しか経っていない、にも関わらず直接呼び出しへをしてきた事。

産屋敷家の当主には先見の明、良く当たる勘があることを知る善逸と小金井ではあつたが、二人が抱く思いは全く正反対ともいえた。

小金井はお館様への尊敬の念を、善逸は予知じみた行動に恐ろしさを。

そんな心情をお互いに顔には出さずに、

産屋敷家への案内役の隠に合流すべく、双雷は駆けた。

### 場面転換

（ああああああああ?! いきなりお館様に呼び出されるとか!? 本気か!? 正気なんですか!? 正直いうけど今の俺つて身元不明の鬼殺隊員だぞ!? は！まさか、裁判が開かれるとか？あり得る、あり得るぞ！）

目隠しをされた状態で産屋敷家に向かう隠に背負われながら、必死に考える。いや、不安しかない。

正直に小金井には自身の持つ情報の殆どを話した。

これに後悔はない。例えあの場で謀つたと言われて切られても…いや、そうなつたら全力の霹靂一閃・神速で逃げ出したが。

それでも産屋敷家や煉獄家に話が伝われば無惨討伐の一助になる筈だから。

無惨が討たれる前だつたかに、炭治郎に聞いていた話がある。うろ覚えではあるが煉獄家に伝わる手記だつたか指南書だつたかに始まりの呼吸、日の呼吸の使い手について書かれていたらしいというのを。

ならば、産屋敷家にもある筈なのだ。  
始まりの呼吸に始まりの剣士、癌や嚇刀に関する文献が。それがあれば自分の話が真実であると分かる筈だ。

（いや、でも待て。そんな文献があればもつと早く無惨が討てた可能性があるよな？どうして…ああ、そうだった。爺ちゃんが話してくれたつけ。長い歴史の中で鬼殺隊が何度も壊滅的な被害を受けたつて）

身体が若返っているせいか、歳を重ねてきて耄碌し始めていた記憶がいろいろと鮮明に甦る。

若かりし日の思い出。泣き虫な自分を鍛えてくれた師の言葉。親友達と駆け抜けた日々。妻に初めて会った時の衝撃、我が子を抱いた感動…

（…て、違う違う、今考える事はそうじゃない。今後の事だ）

修行時代に爺ちゃんが話してくれた内容。

鬼殺隊が壊滅的な被害を受けた、というなら産屋敷家も存続出来ていたとはいえ無事

ではなかつた可能性がある。恐らくだがその際に失伝してしまつたのではないだろうか。

他の者達についても存続出来なかつたのもあるだろうが長い年月のせいで伝えきれなかつたのかもしれない。

代を重ねすぎたのも原因だろう。

(クツ……こんな事ならもつと真面目にお館様や炭治郎から聞いておけば良かつた。いやでも今、この状態が異常事態なんだからどうしようもないか)

まさか自分が若返つて時代も遡つて、もう一度鬼を刈る事になるなど誰が予想できようか?いや、誰も出来ない筈だ。お館様にも無理だろう。出来たら恐ろしすぎる。

(あああああ!やつぱりお館様は恐ろしいに帰結するじやんか!くそ!こうなりや腹括るしかない!頑張れ俺!やれば出来るぞ俺!長男かどうかは分かんないけどやるしかないぞ俺!)

若死にしてしまつた親友が言つていたような記憶がある言葉を胸のうちで叫びなが

ら覺悟を決めようとして決めきれない善逸であつた。